

高島市まちづくり推進会議 報 告 書

(平成27年度～平成28年度)



(第3回高島市まちづくり推進会議)

平成29年3月

目次

ページ

1	ごあいさつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2
	・高島市まちづくり推進会議 委員長 木津陽介	
	・高島市長 福井 正明	
	・高島市まちづくり推進会議 アドバイザー	
	大阪国際大学グローバルビジネス学部 准教授 田中優	
2	2年間の全体スケジュール・・・・・・・・・・・・・・・・・・	3
3	全体会議報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	4～5
4	運営委員会報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	6～7
5	グループ会議報告	
	A. 観光グループ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	8～11
	テーマ：「観光客が行きかう高島市だったらいいのにな」	
	B. 子育てグループ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	12～15
	テーマ：「子育てのしやすい高島市だったらいいのにな」	
	C. 一体感グループ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	16～19
	テーマ：「一体感のある高島市だったらいいのにな」	
	D. 自然グループ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	20～23
	テーマ：「自然の良さを生かす高島市だったらいいのにな」	
	E. 若者定住グループ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	24～27
	テーマ：「若者定住、たくさん的高島市だったらいいのにな」	
	F. 高齢者グループ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	28～31
	テーマ：「高齢者になっても安心して暮らせるまち、高島市だったらいいのにな」	
6	委員の思い・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	32～41
	「これからの高島市に思いを寄せて」	



大阪国際大学グローバルビジネス学部 准教授 田中優

2年間の全体スケジュール

全体会議

第1回全体会議（平成27年6月21日）

内容：ウィッシュポエムによるワークショップ 他

第2回全体会議（平成27年10月25日）

内容：グループ取り組み内容中間報告 他

第3回全体会議（平成28年10月29日）

内容：推進会議の現状とこれから 他

第4回全体会議（平成29年3月11日）

内容：活動報告、「市民協働のまちづくり」について意見交換 他



運営委員会

第1回運営委員会（平成27年8月21日）

内容：グループ会議の進捗状況 他

第2回運営委員会（平成27年12月15日）

内容：平成28年度推進会議の進め方 他

第3回運営委員会（平成28年8月3日）

内容：運営体制について 他



第4回運営委員会（平成28年9月26日）

内容：現状とこれから 他

第5回運営委員会（平成28年11月14日）

内容：報告書と報告会の内容 他

第6回運営委員会（平成29年1月31日）

内容：報告書構成と報告会の内容 他

全体会議報告

第1回全体会議

平成27年6月21日（日） 会場：新旭公民館 多目的ホール

○あいさつ（福井市長）

○協議事項

- ・高島市まちづくり推進会議の設置目的について
- ・ワークショップ（ファシリテーター：田中アドバイザー）、グループ分け
⇒ウィッシュポエム「〇〇〇〇の高島市だったらいいのにな」をテーマに話し合い。
その後、委員が投票により6つのテーマを選定し、グループが決定しました！



（ウィッシュポエムの書き出しの様子）

6つのテーマ

「観光客が行きかう高島市だったらいいのにな」
「子育てのしやすい高島市だったらいいのにな」
「一体感のある高島市だったらいいのにな」
「自然の良さを生かす高島市だったらいいのにな」
「若者定住、たくさん的高島市だったらいいのにな」
「高齢者になっても安心して暮らせるまち、
高島市だったらいいのにな」

第2回全体会議（中間報告会）

平成27年10月25日（日） 会場：今津東コミュニティセンター 大ホール

○あいさつ（福井市長）

○協議事項

- ・グループ中間報告⇒グループリーダーが各グループの取り組み内容を報告
- ・アドバイザーのコメント⇒中間報告に対し、アドバイザーから提案など



（中間報告）



（グループ内意見交換）

第3回全体会議

平成28年10月29日（土） 会場：今津東コミュニティセンター 大ホール

○あいさつ（木津委員長）

○協議事項

- ・ 推進会議の現状とこれから
- ・ 協働提案事業の説明と各グループ提案事業の整理



第4回全体会議（報告会）

平成29年3月11日（土） 会場：新旭公民館 多目的ホール

○あいさつ（木津委員長）

○協議事項

- ・ 各グループ活動報告（報告書に基づいた報告）
- ・ ワールドカフェ形式で「市民協働によるまちづくり」について意見交換

委員名簿（☆：グループリーダー、◎：運営委員）

【観 光】	・ 木津陽介(◎)	・ 藤野政夫	・ 西澤恵美子	・ 川添宏司
	・ 中條祐子	・ 大石幸夫(☆◎)		
【子 育 て】	・ 平松成美	・ 是永宙(☆◎)	・ 桂田孝太	・ 海老澤文代
【一 体 感】	・ 馬場八洲男(◎)	・ 澤孝彦(◎)	・ 井岡仁志(☆◎)	・ 中村清作
	・ 早藤悦子	・ 澤村茂美		
【自 然】	・ 角川康恵	・ 石脇和	・ 榊始(☆◎)	・ 三田村勝
【若者定住】	・ 小林忠伸(◎)	・ 太田直子(◎)	・ 清水俊雄(☆◎)	・ 大塚康将
	・ 桂田亜也子			
【高 齢 者】	・ 三田村徹	・ 泉婦美子(☆◎)	・ 宮田早苗	・ 地村満信
	・ 入江かおる(H28)	・ 上原博子(H27)		

（敬称略・順不同）

事務局

たかしま市民協働交流センター 坂下靖子（事務局長）

高島市役所

(H27)	井上勝志(市民生活部 部長)	和田 通(市民協働課 課長)
	池田正和(市民協働課 参事)	森下 静(市民協働課 主任)
(H28)	北村政司(市民生活部 部長)	青谷 守(市民協働課 課長)
	池田正和(市民協働課 参事)	谷本有梨佐(市民協働課 主事)

運営委員会報告

第1回運営委員会（平成27年8月21日）

会場：今津東コミュニティセンター 大ホール

○協議事項

- ・グループ協議の進捗状況（1グループ5分程度）
- ・グループ協議のまとめ方について
- ・第2回推進会議の進め方および日程



第2回運営委員会（平成27年12月15日）

会場：新旭公民館 多目的ホール

○協議事項

- ・ここまでの振り返り
- ・推進会議の設置目的等の確認
- ・グループ会議の開催状況
- ・各グループの課題の絞り込みと整理
- ・平成28年度の進め方とスケジュール
- ・委員長の選任



第3回運営委員会（平成28年8月3日）

会場：新旭公民館 視聴覚室

○協議事項

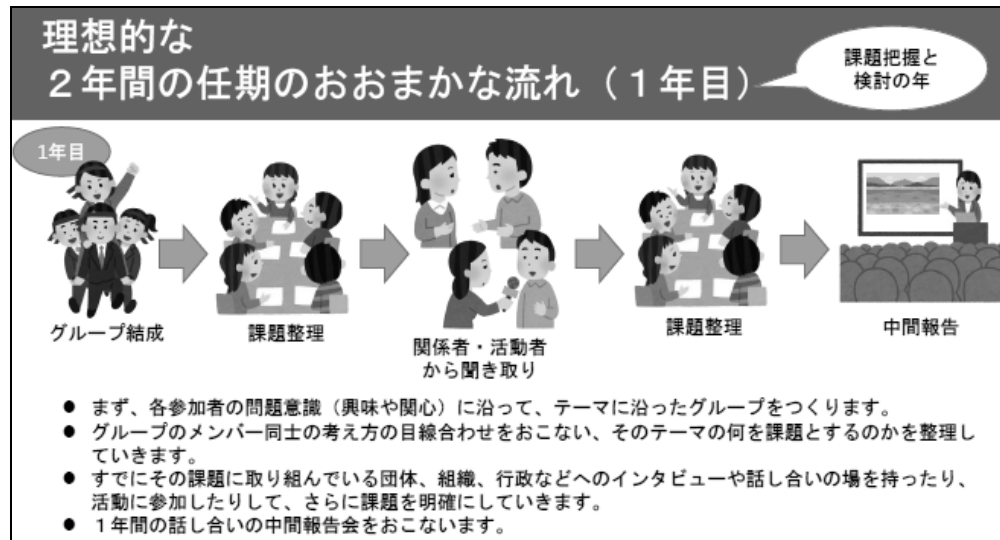
- ・ここまでの経過について
⇒会議の方向性の確認、中長期ビジョンの作成、
- ・運営体制について
⇒運営委員（リーダー）、一体感グループ、
市民協働課、市民協働交流センターの
共同事務局体制
- ・市総合計画への反映、協働提案事業の進捗
- ・委員長、副委員長の選任
委員長 木津 陽介 氏
副委員長 榊 始 氏



第4回運営委員会（平成28年9月26日）

会場：今津東コミュニティセンター

○協議事項・推進会議の現状とこれから⇒次期推進会議のために理想的な任期中の流れを確認



第5回運営委員会（平成28年11月14日）

会場：今津東コミュニティセンター 和室

○協議事項

・ 報告書の内容 ・ 報告会の開催日と内容



第6回運営委員会（平成29年1月31日）

会場：新旭公民館 視聴覚室

○協議事項

・ 報告書の構成 ・ 報告会の進め方 ・ 次期推進会議への思い



グループ会議報告

グループ名	観光グループ
テーマ	観光客が行きかう高島市だったらいいのにな
メンバー	大石 幸夫（リーダー）、木津 陽介、藤野 政夫、西澤 恵美子、川添 宏司、中條 祐子、 (6名)
オブザーバー	(平成27年度) 梅村 一之（商工観光部次長） 桑原 一也（新旭振興室長） (平成28年度) 中川 義人（商工観光部次長） 岡田 喜代治（土木上下水道次長）
事務局	(平成27年度) 山崎 和明（新旭振興室まちづくり担当） (平成28年度) 池田 正和（市民生活部市民協働課）

○課題○

◎高島市が誕生して委員が感じている観光に関する課題や意見は？

- ▼工夫しないと、高島の地に観光客が来ない。
- ▼高島市は面積が広い上に、観光標識が少なくどこへ行けば良いかがわからない。
- ▼JRが風により運休するケースがあるが、その反面、ゆったり感と不便さに値打ちがある。
- ▼観光協会の役割・運営の強化が必要。インターネットを有効活用し観光コース等の紹介が来ないか。
- ▼高島の歴史、重要文化的景観や日本遺産を観光コースとして観光客を呼び込めないか。
- ▼重要文化的景観が市内に3か所あるが、長浜市内の菅浦を含めた4か所で観光客を呼び込めないか。
- ▼観光ガイドは不足していて、その活動、内容、案内料金もさまざまになっている。
- ▼市民が地元の観光地を知らない。地域住民が観光地を知り、観光客を案内することにより丁寧なおもてなしができないか。
- ▼近年は外国人観光客も増加している。観光アプリでの観光地情報提供、無料Wi-Fi整備、多言語パンフレットを活用しインバウンド対策ができないか。
- ▼市内特産品お土産の販売などで観光客の消費を促す仕組みづくりが必要である。
- ▼市民が創作した手作り品を販売する場面が少ない。体験できる仕掛けなどで観光客と交流を深めたり、市民の創作意欲を高められないか。
- ▼いろいろな希望に応じた観光地になっていけるとよい。観光客にいいところを教えてもらう。

○会議経過○

第1回 平成27年7月29日 新旭公民館

- ・課題の抽出 意見交換

第2回 平成27年8月19日 旧新旭公民館

- ・課題の整理 意見交換

第3回 平成27年10月19日 旧新旭公民館

- ・中間報告に向けて議論の整理
- ・課題解決策の検討



第4回 平成28年6月24日 高島市役所本庁

- ・推進会議の今後の進め方の共有
- ・高島市総合計画策定の進捗について
- ・事例研究「日本遺産について」
「しんあさひ風車村について」

説明：市観光振興課職員



第5回 平成28年7月19日 びれっじ1号館

- ・現地調査 「重要文化的景観 大溝の水辺景観」 説明：市文化財課職員
- ・ガイド（有償・ボランティア）の育成について
- ・観光パンフレットのあり方について
- ・公共施設でのW i - F iについて

第6回 平成28年8月25日 今津東コミュニティセンター

- ・推進会議の現状報告
- ・観光ガイド養成についての意見交換
- ・グループ提案内容の協議、精査

第7回 平成28年10月14日 新旭公民館

- ・意見交換
- ・推進会議の課題整理

第8回 平成29年1月13日 今津東コミュニティセンター

- ・報告書作成に関するまとめ

○グループ会議で検討したこと○

◎委員の課題抽出の中で、整理した主な課題に向けた現状把握と解決策の検討（中間まとめ）

重要文化的景観4箇所（管涌を含む）を素材とした 観光客を呼び込むには		
重要文化的景観とは：地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの。（文化庁より） 全国で47箇所認定		
課題	現状・目的	解決策の検討
①ボランティアガイドの育成・充実	*ガイドの高齢化 *ガイドの不足 *地元市民の無関心	*ガイドの育成を最優先に取り組む必要がある。 *地元の意向に沿った案内をし、地域の理解と協力が必要。 - ガイド養成は各文化的景観まちづくり協議会が指導するもの1つの方法で今後の課題である。
②観光パンフ、案内看板、道標の整備及び多言語化。	単なる観光地だけでなく日本の生活文化に興味ある外国人が増加の傾向にある、そうした外国人観光客を呼び込み受け入れる。	パンフはびわ湖高島観光協会、案内看板、道標の整備、などの多言語化については市役所で検討中。

47箇所中4箇所がここに集中

課題	現状・目的	解決策の検討
③観光用アプリを整備	スマートフォンに対応するWebサイトのサービスを充実し、きめ細かい情報発信で観光客を誘致する。	*観光用アプリを行政・観光協会・商工会・青年会議所などと協力し早急に整備する必要がある。 *無料Wi-Fi環境をまずは文化的景観4箇所に早急に整備する必要がある。
④おもてなし	市民がおもてなしの心を育む	市民が知らない⇒知っている市民が増える⇒おもてなしに繋がる
⑤アンケートを来場者をお願いし今後の参考資料にする。		観光客に気軽に地元の言葉で話しかける、答えるだけで充分なおもてなしになる。
⑥びわ湖高島観光協会との連携は不可欠である。		

☆市民手づくり市の開催

手づくり市	目的	解決策の検討
染色・木工・陶芸・園芸手芸など旅行者も体験できる手づくり市を定期的に開催する。	市民の創作意欲、開発意欲も高まり旅行者とコミュニケーションが取れたかしまは面白い、楽しいとアピールする。	出展者、開催場所、開催回数、主催者など今後の課題。 《場所の候補》 *観光物産プラザ「たかしま・まるごと土曜マルシェ」 *藤樹神社境内 他

さまざまな課題や意見を集約して、
3つの大きな課題にまとめ、それらについて解決策を探ってみました！！

- ①手づくり市の拡大と開催方法
- ②観光ガイドの養成
- ③観光地のアクセスの充実

1. 手づくり市の拡大と開催方法

【課題・背景】

- ・市内には、市民が創意と工夫を生かして、染色、木工、陶芸、手芸など、優れた手づくり品（工芸品）が数多くあります。こうした手づくり商品を紹介できる場所は少なく、現在では、道の駅や観光施設の一部において展示販売が行われています。これからは、展示販売場所の拡大や、販売だけではなく体験できる仕掛けを考えながら、観光客を含めた多くの人に見て、関わってもらえる「手づくり市」の開催を検討していく必要があります。

【解決策の検討】

- ・作品の発表の場、また販売の場として朽木の日曜朝市に代表されるような「手づくり市」の開催に向け、市民が安心して活動が続けられるよう組織化を図り、公共施設等の空きスペースなどを活用しながら、定例的に開催できる場所を確保し、情報発信の取り組みが大切です。

【取り組みによる効果】

- ・市民の創作意欲や開発意欲が高められ活力増進につながるとともに、こうした機会を通じて

観光客等の来訪者との交流の深まりによって、おもてなしの機運を高めることができます。
また、これらの動きによって経済効果が高められます。

2. 観光ガイドの養成

【課題・背景】

- ・市には、年間400万人を超える観光客が訪れ、近年は外国人観光客が増加しています。市内には、日本遺産に認定された重要文化的景観地域をはじめ、名所旧跡など観光資源が多く存在し、各地域には様々な観光施設も整備されています。今後はこれらの観光資源にさらに磨きをかけて、観光振興を図っていく必要があります。中でも、観光地の魅力を紹介する観光ガイドは、地域や観光地ごとの取り組みにとどまっており、観光ボランティアガイドや有償ガイドが混在している状況で、いずれの組織も慢性的な人員不足や高齢化が進んでいます。これからは、高島市がひとつになって、「高島ならではの」のおもてなし機運を醸成し、観光ガイドとして活躍いただける市民をひとりでも多く養成していくことが必要です。

【解決策の検討】

- ・高島市の良さを知り、観光客や来訪者を心からおもてなしができる市民を育てていきます。その中から、市域一円の広域ガイドや、観光地や観光施設をスポット的に案内できる観光ガイドを養成していくことが大切です。（ガイド料金統一化の検討）

【取り組みによる効果】

- ・地域の良さを学習し、地域の現状を知り、それぞれの地域の思いを理解した観光ガイドが案内することによって、地域は安心して観光客を受け入れることが可能となります。また、市民にも地域への誇りと愛着といったものを基調として、観光を通じた「まちづくり」への機運の醸成を図りながら、観光地としての魅力を高めていくことができます。また、観光ガイド養成（おもてなしの人づくり）においても、一定有償化することによって、関わる人のやりがいや、生きがいを創出し、活躍の場所を広く提供していくことができます。また、観光ガイドの充実は、旅行商品となりやすく、今後の観光客の誘客に大きなプラス要素となります。

3. 観光地へのアクセスの充実

【課題・背景】

- ・観光客が訪れる中、まだまだ道路や鉄道に代表されるインフラ整備は十分ではありません。特に道路においては、一部の地域では大型観光バスの通行はもとより、普通車でも離合することが難しいところもあり、安全に通行できる道路整備が待たれています。また、これからは、ビワイチやウォーキングの観光客に対する道路案内看板やサイクリングロードの整備が必要であり、インバウンド対策も視野に入れたインフラ整備が重要となってきます。

【解決策の検討】

- ・道路整備、道路案内看板（インバウンド対策）の設置。

【取り組みによる効果】

- ・観光施設や観光地への訪問が容易になり、今後増えていく外国人観光客の受け入れがスムーズになります。

グループ会議の報告

グループ名	子育てグループ
テーマ	子育てしやすい高島市だったらいいのにな
メンバー	是永 宙（リーダー）、平松 成美、桂田 孝太、海老澤 文代 (4名)
オブザーバー	(平成27年度) 早藤 武彦（教育総務部次長） 藤原 忠雄（今津支所長） (平成28年度) 平田 茂樹（教育総務部次長） 廣部 勇（健康福祉部子ども局長） 饗庭 正昭（今津支所長）
事務局	(平成27年度) 木下 晃（今津支所まちづくり担当） (平成28年度) 大森 宜美（今津支所まちづくり担当）
○課題○	
「今いる若者に残ってもらうには」「若い人（子育て世代）に入ってもらえるには」 - 居住地と学校・職場との距離・時間 大学や専門学校がなく、通勤可能な範囲に働く場が少ない。 - 農業など、地域にある素材（財産）を活かして生計がたてにくい 昔は、家にある田や畑をしながら少し別に勤めれば生活できた。今は、専業や主収入が農業の兼業では、大規模でなければ生活できないので、「帰ってこい」とは言えなくなった。 「起業」に対する支援（応援）のシステムが少ない 高島に残る人、帰ってくる人、入ってくる人のために、起業家に対する支援や応援策が少なく、システム化されていない。そのため、「起業して高島に住もう」という若者が出にくく、また、「高島では仕事の選択肢が少ないので残れない、帰れない、入って来れない」という声がある。 「高島で生活する魅力、子育てを支えるシステム」がうまく発信できていない 世代を越えて高島に住んでいる人は地域の魅力を感じにくいので、うまく魅力を発信できていない。その結果、地元の子どもたちも地域の魅力に気づきにくく、高島を出て行ってしまう。また、子育てを支えるシステムは十分あるのに、必要な人に情報が届いていない。 - 子どもの移動手段が十分でないため、参加の機会が制限されている 高島市は、公共交通が十分でなく、車がなければ生活できない地域である。そのため、自らの移動手段を持たない交通弱者である子どもが、体験活動や教育講座等に参加したくても、家庭や地域での送迎がないと気軽に参加することができない。 - 学童保育・保育所の運営 子どもにとっても親にとっても優しく、家庭の事情にもより柔軟に対応できる運営への支援拡充が求められている。	

○会議経過○

第1回 平成27年7月29日 安曇川公民館

- ・課題の抽出 意見交換

第2回 平成27年8月17日 安曇川公民館

- ・若い人（子育て世代）に入ってきてもらうには

第3回 平成27年9月16日 安曇川公民館

- ・高島高校、安曇川高校への新学科の誘致 ・移動支援・ボランティアの育成
- ・保育所運営の弾力化

第4回 平成27年10月6日 今津支所

- ・保育所運営の弾力化に向けた、制度や現場の現状把握
- 説明：市子育て支援課職員、市こども園職員

第5回 平成28年3月3日 今津支所

- ・今後のグループ会議の進め方

第6回 平成28年4月11日 おっきん棕川交流館

- ・平成28年度の取り組み

第7回 平成28年5月10日 朽木公民館

- ・移送支援、保育サービスの現状把握

第8回 平成28年6月6日 高島高等学校

- ・生徒会役員との意見交換



第9回 平成28年6月20日 安曇川公民館

- ・市総合計画への反映

第10回 平成28年8月28日 今津支所

- ・協働提案事業への意見聴取

第11回 平成28年10月19日 今津支所

- ・グループ会議の検討内容の共有



第12回 平成29年1月12日 今津支所

- ・報告書作成に関するまとめ

○グループ会議で検討したこと○

ふるさと教育、魅力発信

【現 状】

◇市内の中学校を卒業した生徒の２５％が市外の高等学校等に進学している状況にある。

◇中学校までは地域との関わりがあるが、高校では交流がなくなる。

【原 因】

◇よい大学へ行って、よい就職先につくのが、
子どもの幸せ、という親の思いが強い。

◇高島の良さへの気づきの機会が少ない。

地域ブランド調査における滋賀県の順位

指 標	２０１５年	２０１６年
魅 力 度	４１位	３３位
愛 着 度	３０位	１３位
自 慢 度	２９位	１５位

【解決策】

◇子どもの心に種をまく

高島の魅力である豊かな自然や素晴らしい景色

を毎日見て育てば感性も変わってくる。子どもの頃に自然の中でおもいきり遊んだ体験や感動とその幸せな記憶が郷土愛につながる。子どもの頃に、生きた体験、感動、高島大好きという気持ちや心を育て、いい思い出と良さを感じられる種まきをしておけば、結婚しても我が子に同じ体験をさせたいというプラスの連鎖につながる。

(ブランド総合研究所 調査)

◇良い思い出が生まれる地域

まわりに自分たちを応援してくれる大人がいっぱいいたとか、人間関係がものすごく気持ち良かった、という良い思い出が生まれる地域にしていく。

◇離れていてもつながる心を育む

高島へ帰って来なければだめだということではなしに、外へ出ても、遠いところから高島を思い、地域との関係性を育んでくれる子どもを育てる。

◇孫ターンに着目する

祖父母がいる町なら親しみもあり、すんなりと地域に溶けこめるというメリットがある。祖父母の元へ戻る「孫ターン」にも着目する。

◇子どもの可能性を伸ばす

子どもたちの可能性は無限にあり、高島に残って高島の地域を良くしていこうという子どももいれば、世界で活躍するような子どももいる。高島の子どもを高島にしばるよりもいっぱい可能性をつくっていく。自由に可能性を育てる。子どもが自分の責任・判断で選択し、自己決定できる、自立した子どもを育てる。

◇地域を学び、誇りを育む

地域学（たかしま学）講座を開催し、地域のスペシャリストとの出会いの機会を設ける。移住者が感じる地域や人の魅力が市民みんなの誇りになればよい。毎年秋に開催される「おっきん！ 椋川」は、地域のお年寄りに誇りを取り戻してもらう機会となっている。

◇高校生の知恵や力がいかせる場面づくり。

◇情報の発信

小中学校での自然体験活動、他市に比べ充実した子育て支援制度について、関心層にターゲットを絞り積極的に発信する。

移 送 支 援

【現 状】

- ◇市内中心部以外に住む子どもは特に、利用できる交通機関が少なく自分の意志で集団活動等への参加が制限されている。子ども同士で遊ぶ機会も家庭の事情に左右され、自宅で過ごす時間が多くなり、人間関係が希薄化する恐れがある。
- ◇子どもが減り、地域で子どもを育てる支援機能が弱まり、子育てに対する不安や負担感を増幅する結果になっている。
- ◇支援が必要な世帯がどれくらいあるのか現状が把握できていない。
- ◇ファミリー・サポート・センター事業の利用が地域により差がある。

【原 因】

- ◇公共交通機関が少なく、子どもたちが自分の力で行ける場所には限界がある。
- ◇ファミリー・サポート・センター事業の周知が十分でない。

【解決策】

- ◇高齢者施策で検討されている移動支援のシステムを子育て施策にも取り入れる。
- ◇高島に合った移動を支える有償ボランティア制度を構築する。シニア層の活躍の場の創出にもつながる。

高 校 の あ り 方

【現 状】

- ◇高島・安曇川両高校の2年生全員に実施したアンケートでは、「将来、高島市に住みたいと思いますか」という問いに、50.7%が「住みたくない」との回答結果だった。
- ◇市内中学校長、高島・安曇川両高校の校長、また県教育委員会とも、市教育委員会が定期的に懇談を持ち、市内外の中学生在が多く志願してくれる魅力や特色ある学校づくりが進められている。

【原 因】

- ◇高島高校生徒会との懇談では、高島市内には買い物など日常生活で楽しめる場所がなく、電車の本数も少ないことや、外へ出た方がさまざまな経験ができ、広いものの見方も学ぶことができる、との意見であった。

【解決策】

◇特色ある専門学科

高島高校、安曇川高校に介護・福祉系、医療系、発酵食の専門学科を誘致する。特色ある学科があると、その方面に進みたいと考える地元の子どもが他所に行かずここで進学することができ、学んだことを地域で生かすことができる。例えば、「発酵＋農業＋付加価値＝市の特色⇒専門性」が学べるような特色ある学科があれば、全国からの通学者も見込める。

◇協力企業による奨学金制度の創設

市内の企業から寄付を募り、地元で就職した場合には返還が不要な給付型奨学金制度を創設する。

グループ会議の報告

グループ名	一体感グループ
テーマ	一体感のある高島市だったらいいのにな
メンバー	井岡 仁志（リーダー）、馬場 八洲男、澤 孝彦、中村 清作、 早藤 悦子、澤村 茂美（6名）
オブザーバー	（平成27年度）青井 真一（総務部管理官）平田 茂樹（安曇川支所長） （平成28年度）西川 彰（政策部次長） 清水 真理子（総務部次長） 青井 真一（行財政改革推進局長） 松田 博文（安曇川支所長）
事務局	（平成27・28年度） 山本 満（安曇川支所まちづくり担当）

○課題○

1. 一体感が不足していると感じること

- ▶ 市の一体感は根幹にあるべきもの。これがうまくいけば、様々なことがうまくいくのでは。
- ▶ 昭和の合併から平成の合併、さらに古くから培われた歴史、文化、風土がある。合併したからといって、そう簡単には変わらない。
- ▶ 市域の公平なランドデザインをどう描くのか、そこが見えないとひとつになれない。（市総合計画の共有）
- ▶ 人口減少、少子高齢化で集落維持機能が低下しつつあり、集落単位よりも広い範囲で支え合っていく必要がある。
- ▶ 住民と行政の互いにフラットな関係、真に協働できる関係づくり。

2. 一体感づくりに向けたキーワード

①場づくり・しかけづくり

- ▶ まちづくりに対しての住民の思いを共有できる「場づくり」や「しかけづくり」が必要。
- ▶ 思いを共有できるしかけが必要。他地域の自慢を自分も自慢できるようにならないと。

②協働関係

- ▶ 市民の声を聴く場が市民参加の第一歩。市民と行政の関係を深める機会が必要。今までもあったと思うが、問題はその広がりがないこと。
- ▶ 様々な機関や団体の「意識の垣根」をとっばらうこと。

③参加・交流

- ▶ 幅広い市民がまちづくりに関心を持って参加する地域にしていく。
- ▶ 人と人が交流し、知り合うことから一体感が生まれる。
- ▶ 一人ひとりの活動している人の声を聴くことが大事。

④共通の目標づくり

- ▶ 「まちづくり」という共通の目標を持ち、共感して応援する関係をつくる。
- ▶ 何かの目標に向かって走っていくという意識を高める。

○会議経過○

第1回 平成27年7月4日 安曇川公民館

- ・そもそも一体感とは何か？ 意見交換

第2回 平成27年8月9日 安曇川公民館

- ・一体感とは？大事なこと・気づいたことの再確認

第3回 平成27年9月26日 安曇川公民館

- ・一体感の視点からのまちづくり
- ・第2回全体会議の進め方について意見集約

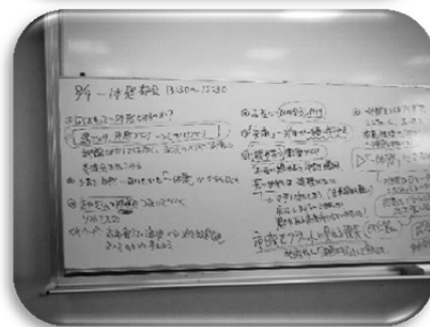


第4回 平成27年11月8日 安曇川公民館

- ・まちづくり推進会議と行政の役割
- ・今後の推進会議のあり方

第5回 平成28年8月7日 安曇川公民館

- ・運営委員会の内容共有
- ・推進会議運営の課題解決と事務局体制づくり

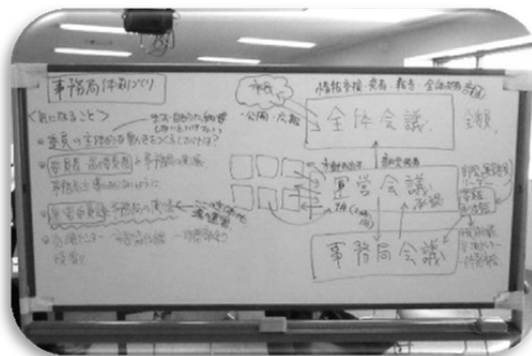


第6回 平成28年9月1日 安曇川公民館

- ・事務局会議として役割と運営委員会の進め方

第7回 平成28年10月20日 安曇川公民館

- ・推進会議の現状とこれから
- ・全体会議の進め方



第8回 平成28年11月3日 高島市役所

- ・全体会議の振り返り
- ・運営委員会の進め方

第9回 平成28年12月8日 安曇川公民館

- ・運営委員会の振り返り
- ・報告書作成について

第10回 平成29年1月19日 安曇川公民館

- ・報告書作成に関するまとめ

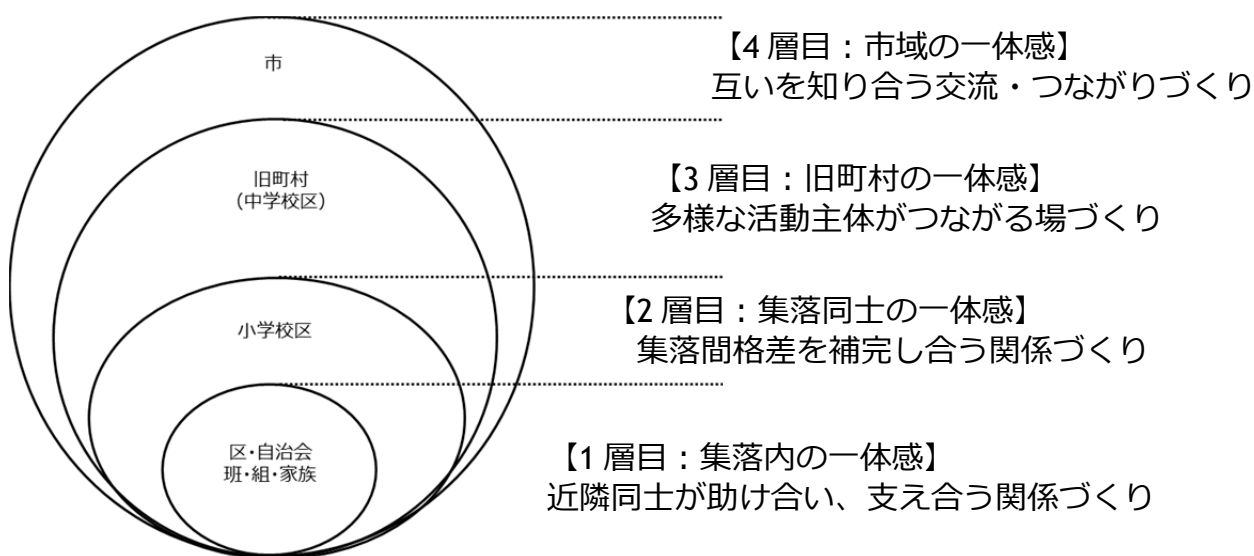


○グループ会議で検討したこと○

【平成 27 年度の議論】

●そもそも一体感とは（前提となる共通認識）

- ▶ 「高島市の一体感をつくる」ということは、それぞれ違う背景（文化、歴史、風土）を持つ互いの価値、存在を認め合い、助け合える関係を築くことが前提にある。
- ▶ 一体感とは連帯感でもある。市民みんなが共感できる共通の克服すべき目標（例：人口減少問題に起因する課題）があることで立場や利害を越えて連帯できる。
- ▶ また、一体感とはある意味「強い高島市」を創ること。感覚的な一体感ではなく、市域、旧町村域、小学校区域、集落域とそれぞれの圏域ごとの一体感をつくり、重層的につなげる必要がある。



●一体感づくりに必要な要素（具体化の種）

- ▶ 地域エゴを乗り越えて、互いを認め合うためには、お互いを知る（面識がある）関係をより多くつくっていく必要がある。（知り合う場づくり）
- ▶ 市民、議会、行政の距離感、世代や性別の違い、集落間の違い、異業種間のつながり、移住者と地元民など、縦割りや分断をつなぐ様々な切り口がある。
- ▶ 市の将来像（グランドデザイン）をどう描くのか。ビジョンを可視化するためには市の総合計画を市民参加、官民協働で策定し、みんなで行動していく。
- ▶ 従来の価値観に縛られず自由な発想ができる、若者やU・Iターン者が横つなぎのキーパーソンとなる。（風の人と土の人の共働）
- ▶ 高島市が好き。誇りに思うという気持ち（郷土愛）の醸成が一体感の基盤になる。
- ▶ ボランティアや市民活動といった、市民の社会参加の機会を増やすこと。（奉仕的発想ではなく、自分のまちを住みやすくする活動への主体的参加の促進や楽しみながら参加できるプログラム）

【平成 28 年度の議論】

●まちづくり推進会議の今後の進め方について

市民（委員）が主体的に会議に参画し、行動できるような体制づくりを行政との協働でつくっていく必要がある。

- ・まちづくり推進会議の位置づけがわかりにくい
- ・まちづくり推進会議委員・グループの役割がわかりにくい
- ・事務局体制のあり方
- ・具体的な取組み実践の方法

①会議の目的

- ・何のために、何を指して本会議があるのかの確認、共有
市の示す「設置目的」をどう具体化するのか、会議の位置づけなどが委員の中に腑に落ちていない。
- ・中長期ビジョン、短期目標の協議、共有
何をいつまでに決めて、それを誰がするのか、現委員の任期中にどこまでのことをして、次の委員に何をバトンとして渡すのか。

②会議の位置づけ（特に推進会議・グループでの検討事項と政策との関係）

- ・庁内各課との関係
各グループの課題を各部局・課とどのようにすり合わせていくのか。市のやること、民間・市民のやることの協力関係。
- ・市総合計画、地方創生総合戦略の所管課との連携、市議会との関係
推進会議での議論が政策としてどう反映されるのか。各グループでの課題が直接政策化されるのか。

③会議の推進体制・事務局体制

- ・要綱にある「委員長および副委員長」の決定
- ・運営委員会：委員が主体的に参加できる運営体制づくり
- ・委員と行政による協働事務局体制づくり
- ・市民協働交流センターの役割

【例えば】

- ・市民協働交流センターが実務・調整役的な役割を持ち、委員長、副委員長、運営委員数名（幹事的な役割？）と市民協働課で事務局会議を開催。
- ・各グループの課題を持ち寄り、課題を整理し、推進会議として進めていくべきことを明らかにする。グループ間で一緒にできることなどを調整する。
- ・関連する庁内各課との連絡調整は市民協働課が担う。
- ・これらを全体協議する場が運営委員会。
- ・一体感グループは全体をコーディネートする役割

以上のような課題整理をおこない、一体感グループと市民協働課、市民協働交流センターによる話し合いをおこなって、平成 28 年度下半期から 3 者による協働事務局体制を構築しました。

グループ会議の報告

グループ名	自然グループ
テーマ	自然の良さを生かす高島市だったらいいのにな
メンバー	榑 始（リーダー）、角川 康恵、石脇 和、三田村 勝（４名）
オブザーバー	（平成２７年度） 饗庭 正昭（環境部次長） 藤原 秀夫（農林水産部管理官） 中江 重隆（農林水産部次長） 岩松 充司（マキノ支所長） （平成２８年度） 川原林 剛（環境部次長） 中島 勲（農林水産部次長） 竹谷 紀子（マキノ支所長）
事務局	（平成２７・２８年度） 中川 美知夫（マキノ支所まちづくり担当）

○課題○

メンバーの半分（２名）は高島市出身、あと半分（２名）は滋賀県外からの移住者。

高島市は自然豊かで魅力的と感じる。高島市を訪れる人から自然の良さを教えられることも多い。自然資源も多くあり、それを活用できたらいいと思う。

しかし、地域の人たちはその自然の良さ・魅力に気づいていないことが多いのではないかと。高島が不便で、大学・就職や遊ぶにも都市部まで出かけなければいけない、など否定的な意見も多い。

「自然の良さを生かす」ためには、地域の人たちに高島のいい所を理解・見直してもらえることが先決だが、それはどのように進めていけばいいのか。高島市として合併してからの１０年間この課題は「枕詞」として何度も繰り返し取り組まれてきたが、なかなか先には進んでいないようにも思える。

自然グループではまず実際に「高島のいいところ」作りに取り組んできたところを見て回り、意見交換して「自然の良さをいかす」ための視点づくりから始めることとした。その後、「市」と「市民」がそれぞれの立場をいかした連携をいかに構築するかを考えた。

なお、自然グループでは、「市」と「市民」協働の姿勢を保つため、「オブザーバー」もメンバーとして意見交換に加わることにした。

○会議経過○

第1回 平成27年7月6日 朽木支所

- ・課題の抽出 意見交換

第2回 平成27年8月4日 マキノピックランド

- ・事例研究「メタセコイア並木の成り立ちと活用について」

講師：マキノピックランド 高木正 氏

第3回 平成27年9月29日 今津支所

- ・第1回運営会議の内容共有
- ・今後の課題解決方法の検討

第4回 平成27年10月27日 針畑ルネッサンスセンター

- ・事例研究「針畑地域振興協議会の取り組みについて」

講師：針畑地域振興協議会 西川明夫氏

第5回 平成27年11月24日 市役所別館

- ・事例研究「高島市の景観政策について」 説明：市都市計画課職員
- 「高島市まち・ひと・しごと総合戦略について」 説明：市企画調整課職員

第6回 平成28年4月26日 朽木支所

- ・平成27年度のまとめ
- ・平成28年度の取り組み

第7回 平成28年6月13日 朽木支所

- ・まちづくり推進会議の今後の進め方の共有
- ・高島市総合計画策定の進捗
- ・委員からのグループ提言案の発表

第8回 平成28年8月22日 朽木支所

- ・グループ提案内容の協議、精査

第9回 平成28年10月17日 朽木支所

- ・意見交換
- ・推進会議の課題整理

第10回 平成29年1月6日 森林公園くつきの森

- ・報告書作成に関するまとめ



朽木生杉ブナ原生林の現地視察



くつきの森で、グループ会議

○グループ会議で検討したこと○

1、現地視察・研修

・マキノピックランド研修



マキノ探検・・メタセコイア並木はなぜできたか？

40 年前は「こんな実も花も出来んもん植えて・・」と。

今は「並木百選」などに選ばれ、高島観光の目玉の一つに。

住民と行政が協働で継続的に並木の手入れ・保全を行っている。海津の桜も同じ。



旧マキノ町の住民・行政の意識が「マキノは観光」という枠で認知され、共有されていた。

・針畑ルネッサンス研修



針畑地域には「ものがたり」がある

古くから「鯖の道」として若狭から京への文化も往来してきた歴史街道であった。

小入谷の雲海・カキツバタ群生・生杉ブナ原生林など自然に恵まれている。

特産品の製造・販売も行っているが、高齢化と人口減少でそれを担う者がいない。

移住する若者もいるが、地域住民との共存共栄が課題となっている。

・高島市景観政策研修

屋外広告物について、高島市は先進的な取り組みがなされている。

高島市屋外広告条例は、自然豊かな景観などを考えて、市内を4つのゾーンに分けて、それぞれに適した規制をしている。

自然をそのままに残す。高島の自然を活かしながら、商業などの活用ができる地域開発を・・・自然豊かな高島なので、高島市屋外広告条例のようなゾーンを分けて、景観計画の条例化も必要では。

2、自然研修を終えてのまとめ

- ・高島市民に対して、高島の自然の良さや自然の魅力を伝えていく必要がある。
- ・高島の魅力の伝え方、手法をもっと広げたり、検討していく必要がある。

3、まちづくりへの提言案

- ・ 日常の生活を活かした、人と自然のつながり、満足感と幸せを感じられる取り組み。たとえば、どんぐりを植え苗木を育て、山に植樹する「どんぐりプロジェクト」のような、自然や森や山への理解を深める活動などの取り組みを継続・拡大していけないだろうか。
- ・ 統合や廃止などにより、高島を訪問される方に自然を案内できる施設が減っている。現在ある施設は活用していければいいのでは。
- ・ 放置された伐採木や倒木を活用する「木の駅」のような活動が広がるといいのでは。
- ・ 高島市の自然に関するビジターセンターを提案する。

4、自然グループとしての提案

(1) 市民協働交流センターの自然版のイメージで「ビジターセンター」の設置

ビジターセンターの業務の内容

- ・ 高島の自然にかかわる情報の集積と提供。
- ・ 高島の自然にかかわる市民、市民グループの交流。
- ・ 高島の自然にかかわる市民、市民グループのサポート（必要に応じて）。
- ・ 関係施設の一元管理。

(2) 自然学習の場としての高島の再構築

- ・ これまであった良い取り組みを発展させ、拡大。
(例) どんぐりプロジェクトなど
- ・ 自然体験メニューの開発や拡大。
(例) 今森光彦さんの「萌木の国」のような企画を全市で
- ・ 上記企画の売り込み。

5、まとめ

自然を軸として・・・



自然をいかし、それぞれの地域の文化と特性がつながる、まちづくりができたらと・・・

グループ会議の報告

グループ名	若者定住グループ
テーマ	若者定住、たくさん的高島市だったらいいのにな
メンバー	清水 俊雄（リーダー）、小林 忠伸、太田 直子、大塚 康将、 桂田 亜也子（5名）
オブザーバー	（平成27年度） 上山 幸応（政策部次長） 松田 博文（土木上下水道部次長） 北村 政司（高島支所長） （平成28年度） 栗原 一也（市民生活部次長） 曾根 孝司（教育総務部管理官） 和田 通（高島支所長）
事務局	（平成27・28年度） 浅井 嘉己（高島支所まちづくり担当）

○課題○

若者定住に関する沢山の課題を出し合い、その中から5つの課題を整理しました。

1. 働く場

- ・地元企業の求人はあるが、職種の選択が限られている。
- ・交通の便が悪い（湖西線の課題）。

2. 青年の集まる場

- ・青年が自由に集まり、使える施設が少ない。
- ・青年団の新規加入が少ない。
- ・青年と地域の関りが少なくなっている。

3. 家庭での教育

- ・親は子の進路について、子にゆだねている。
- ・帰郷の意志が育っていない。
- ・田畑は他人に任せている。
- ・自治会に入らない家庭が増えている。⇔しがらみの強い地域性もある。

4. 教育と福祉の充実

- ・移住者の多くは子どもを育てやすい地域と感じている。
- ・地元で育った人と移住者の意識をつなぐ人がいない。
- ・学童保育の充実が必要。

5. 中学・高校での地域への愛着の育成

- ・中学生は地域を学び、地域企業での経験の中で職場体験もあり、地域行事への参加も少しあるが、一方、高校生は地域との関わりが少ない。

○会議経過○

第1回 平成27年7月14日 新旭公民館

- ・意見交換「若者定住に必要なこと」8つの課題

第2回 平成27年8月17日 新旭公民館

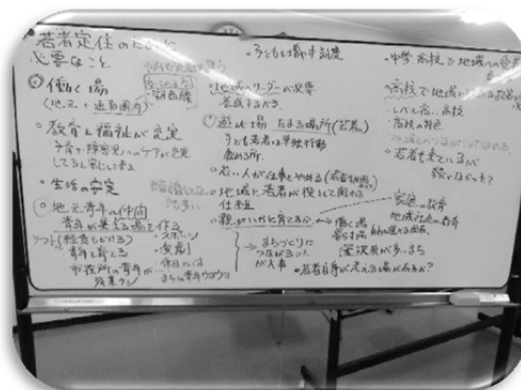
- ・課題の抽出

第3回 平成27年8月31日 新旭公民館

- ・青年団の現状と課題

第4回 平成27年9月18日 新旭公民館

- ・市内青年団員との意見交換
- ・6つのアクションプラン



第5回 平成28年6月21日 新旭公民館

- ・平成28年度の運営方針と取り組み内容
- ・高校生アンケート調査報告

第6回 平成28年7月22日 新旭公民館

- ・高島市の移住定住施策の紹介
- ・グループの協議から見てきたもの

【第65回滋賀県青年大会を視察】

(平成28年8月27日)

第7回 平成28年8月30日 新旭公民館

- ・第65回滋賀県青年大会の支援と結果
- ・第3回運営委員会の報告
- ・グループ協議内容の高島市総合計画への反映

第8回 平成28年10月23日 新旭公民館

- ・第4回運営委員会の報告
- ・高島市まちづくり推進会議の現状とこれから
- ・グループのまとめ



○グループ会議で検討したこと○

< 5つの課題について整理 >

	現状あるもの	現状ないもの	課題解決方法？
働く場	求人枠はある 選択肢は少ない	通勤手段が不安定	求人と求職の不一致 福祉の職場をPR
青年が集まる場	青年団の存在	新人が集まらない 安定的に使用できる施設がない	他の組織とのつながり 目的を明確化し共有する 福祉に目を向ける組織
家庭での教育	子の自由を了解 田畑は他者に任す	帰郷の意思がない 自治会に加入しない	地元と移住者の感覚の 違いをつなぐ 自治会等の役回りを創る
教育と福祉の 充実	保育所は十分ある	学童保育の整備充実	子どもの遊び・学びの場
中学・高校での地 域への愛着の育成	地域歴史の学習 企業体験・ 地元行事参加	高校と地域の連携	中学・高校での カリキュラムの改善・ 地域学を推進していく

<注目した課題> 青年が集まる場、青年団の存在

若者が定住するために、青年が集まる場、青年団の活動が重要になると考え、青年団の現状をヒアリングし、課題を整理し、解決策として6つのアクションプランを提案しました。

○青年団の現状と意見

- ・市内の各青年団が地域をベースに活動を行っており、連携が少ない。
- ・そこに行けば青年団と会える！という拠点が必要。
- ・青年団と行政をコーディネートする、社会教育主事の役割。
- ・青年教育に関する資格を持っている市職員が活かされていないのでは。
- ・青年団OBと若い世代とつながりの場がほしい。
- ・青年団のまちづくりの活動が見えないので、見える活動をする。
- ・様々なイベントを企画し、実施している。(夏祭り、ヨシ刈り、駅前清掃など)
- ・補助金増額について。

○青年団の問題点・・・自由に使用できる施設が無い！

若者が時間制限なく、自由に集まれる場所の充実が必要！

家と仕事ともう一つ「サードプレイス」を創造する。

効果：語り合い、議論を深める

責任を与え自己管理能力を醸成する

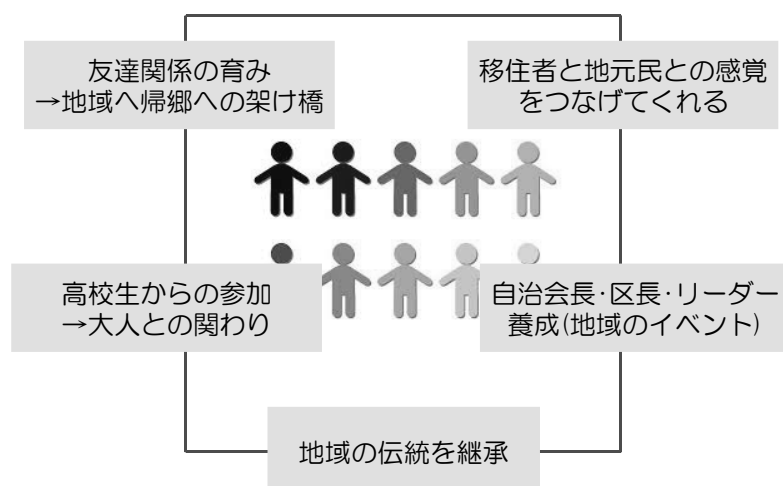
場所に人が人を呼ぶ

地域に興味を持つ人が増える

○解決策としての6つのアクションプラン○

1. 市内の公共施設の開放
2. 市内の空き家を借り上げて青年団へ貸し出し
3. 平成28年度 滋賀県青年大会にむけ、勤労青年の参加を喚起
4. 若者への周知と参加
5. 高校生の青年団参加
6. 補助金の増額

青年団への期待



6つのアクションプランの絞り込み

- ① 施設の改修・利用できる施設の整備。公的施設使用時間の緩和。各部署の関係者周知。
- ② 空き家対策と連携し、各地に青年団が使用できる場を整備。
- ③ 青年大会参加者が今後の若者活動の中心を担う。青年の意識改革、行政と連携を進める。
- ④ 市内の中学・高校生にカリキュラムの改善を行う。
- ⑤ 高校と行政の連携。高校と家庭の連携。
- ⑥ 青年団活動にふるさと納税を充当する。



グループ会議の報告

グループ名	高齢者グループ
テーマ	高齢者になっても安心して暮らせるまち、高島市だったらいいのにな
メンバー	泉 婦美子（リーダー）、三田村 徹、宮田 早苗、地村 満信 入江 かおる（平成２８年度）、上原 博子（平成２７年度）（５名）
オブザーバー	（平成２７年度） 橋本 妙子（健康福祉部次長） 岡田 喜代治（朽木支所長） （平成２８年度） 枝 秀樹（健康福祉部次長） 山本 純子（朽木支所長）
事務局	（平成２７年度） 齊藤 房伸（朽木支所まちづくり担当） （平成２８年度） 前田 温夫（朽木支所まちづくり担当）

○課題○

高齢者を取りまく問題点・・・今はこうなっている ５４項目の課題を抽出！

○高齢者の生活環境は・・・

- ・一人暮らしで基本的な生活が出来なくなった高齢者に、ご近所の身近な支援がなくなっている。
- ・核家族化が進み、家族のかかわりが薄くなり、また地域の中の助け合いも難しくなっている。
- ・国民年金のみの高齢者で低収入の方も多く、毎日の生活が苦しい。
- ・朽木地域では歯医者さんが無く、バスに乗れない高齢者は困っている。
- ・交通利用券があっても重い荷物を持ってバスの乗り降りが出来ず、地域の商店街、大型スーパーや量販店での買い物ができない。

○高齢者を取りまく地域は今・・・

- ・福祉推進委員会を組織出来ない自治会があり、ふれあいサロンの継続が困難な所が増えてきている。サロンに来られない人の居場所がない。
- ・老人会の組織率が低くなり、地域とのかかわりが少なくなっている。地域で孤立している高齢者が増えている。
- ・限界・準限界集落で自治会の運営が出来ないところが今後増えてくる。
- ・区長が１年交代の自治会も多く、地域での新たな福祉事業が取り組めない。
- ・地域ぐるみでみんなが集まるイベント等が減少し、益々高齢者の居場所がなくなってきている。

○会議経過○

第1回 平成27年7月9日 安曇川公民館

- ・とりまく問題点、今こうなっている

第2回 平成27年8月20日 安曇川公民館

- ・「とりまく問題点、今こうなっている」
に対して「どうするか どうしたらよ
いか何が必要か」



第3回 平成27年9月10日 高島公民館

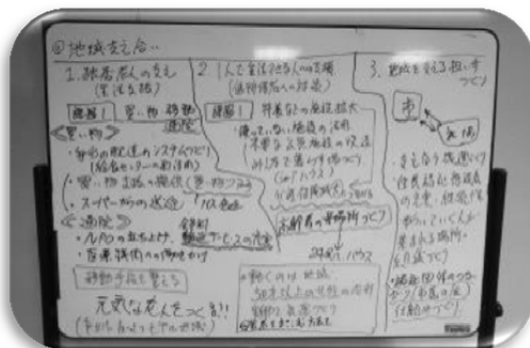
- ・独居高齢者をどう支えるか（生活支援）
- ・生活が苦しい高齢者をどう支えるか（低所得者支援）
- ・地域で支える担い手をどう支えるか（支える体制づくり）

第4回 平成28年2月3日 安曇川公民館

- ・高島市地域福祉計画（第2次）中間見直しについて
説明：市社会福祉課職員
- ・高齢者サービス・高齢者事業について
説明：市地域包括支援課職員、市長寿介護課職員
- ・高齢者を支える取り組みについて
説明：社会福祉協議会職員

第5回 平成28年6月13日 安曇川公民館

- ・まちづくり推進会議の進め方
- ・高島市総合計画策定の進捗



第6回 平成28年8月29日 安曇川公民館

- ・グループ協議内容の総合計画への反映
- ・グループ協議内容のまとめに向けて

第7回 平成28年10月14日 安曇川公民館

- ・まちづくり推進会議の現状とこれから
- ・意見交換

第8回 平成29年1月11日 安曇川公民館

- ・報告書作成に関するまとめ



○グループ会議で検討したこと○

◎『高齡者グループ』として、この2年間の会議の中で意見交換してきました。市民目線で市民として何ができるのか、市に何が提案できるのか、十分な討議は出来ませんでした。高島市の高齡者を取り巻く厳しい現状を共有しながら、次の3項目の具体的な施策と1項目の要望を提案したいと思います。

1. 高齡者の生活支援

《現状》高齡化率 32.4%（平成 28 年 12 月末現在）、毎日の基本的な生活がしづらくなっている高齡者世帯が急増している中、家族や地域のつながりの希薄化で、地域住民の支え合い・助け合いが急務となってきた。交通利用券があっても、重い荷物を持つてのバスの乗り降りが出来ず、少し遠方での買い物が出来なくなっている。買い物支援は一部の地域で有償無償の違いはあるが既に取り組まれている。しかし市内一円にまで広がっていない。低年金の高齡者も多い中、高額なタクシーを利用出来ない高齡者も多い。

《具体的な取り組み》

- ① 路線バスを利用できない高齡者を対象に、地域住民のボランティアによる送迎移送サービスの実施。
- ② 路線バス等を利用できる高齡者で、買い物後の重い荷物が持てない方の支援として、地域住民のボランティアと一緒に乗車し、買い物などの生活支援サービスを行い自宅まで付き添う。

《効果》住民による買い物支援が充実すれば、自分で買い物できる楽しみが増え、高齡者の生活力が高まり、元気でいたいというモチベーションも高まる。

2. 手作り弁当の配食サービス

《現状》独居高齡者の中には、自分で料理ができなくなっている方が増えてきている。コンビニ等でも惣菜は購入でき、また民間事業所のお弁当宅配もあるが、ごく普通の家庭料理が食べられない高齡者が増えている。

《具体的な取り組み》

- ① 地域のシニア世代等の特技を生かし、月に数回地域の配食と見守り活動を実施。
- ② 配食する手作り弁当は、各地域の公共の調理場を確保し地域の食材を使用する。

《効果》手作り弁当をお届けし、美味しい食事を味わってもらうことで食の楽しさ大切さを感じてもらえる。お弁当配達時の会話を通じて地域とのかかわりが深められる。市内の一部地域で既に取り組まれているが、お弁当作りに携わるスタッフも地域で活躍出来る場が確保され、生きがいにつながる。

3. 公共施設の高齢者の有効利用

《現状》市内公共施設の空いている時間の有効利用として、自治会を越えた地域の高齢者の居場所づくりの場として利用できないか。

《具体的な取り組み》

公共施設を高齢者の居場所づくり、サロンの場として有効利用する。自治会を越えた広域の高齢者のつどいの場となり、調理場があれば地域の元気な高齢者がスタッフとしてかわり、温かい家庭料理等の提供も出来る。

《効果》広域な高齢者の居場所づくりとなり、地域の住民スタッフとのかかわりの中で高齢者の孤立を防ぐことができ、定期的開催することで老後の楽しみの一つとなり、生きがい作りに役立てることができる。

地域の支え合いへの支援体制の強化のために

☆地域支え合い活動の推進役となる人材の確保と育成ができる体制づくりの強化。

- ① 急激に増加し続けている高齢者世帯の『地域での支え合い』を推進していくためには、地域の中で中核となって活動できる人材が必要です。
- ② 地域で支える人材の育成を担っている市社会福祉協議会と行政、そして地域住民が地域の中で人材の確保と育成に関わりあう地域づくりが必要です。
- ③ 高齢者が安心して暮らせる高島市にするためには、地域福祉活動の強固な仕組み作りが急務であり、そのためにも地域住民と行政や福祉の専門職による地域の支えあいを育む協議の場が必要です。

☆各自治会が地域ぐるみの支え合い、高齢者の居場所づくり等を計画・実行できるよう、市社会福祉協議会と行政が常に連携し地域に根ざした自治会の支援を強化。

- ① 各自治会の見守り隊・福祉推進委員会の活動が広がり、自治会住民が支えあう力を育むことが必要です。
- ② 地域住民が『地域ぐるみの支え合い』が必要だと感じられる地域の取り組みを推進していくためにも、行政・市社会福祉協議会・各地域住民福祉協議会等の地域福祉を推進する多様な組織が各自治会への支援を協働で進めることが必要です。

委員の思い

2年間のまちづくり推進会議を振り返って思うこと

最初の現状、課題出しの時から驚きがあったのを今でも覚えています。あれだけたくさんの委員さんから多種多様な意見がでてくるとは正直思っていませんでした。私が考えていたことよりもスケールの大きい話や、その地域の人でないとわからないような話が多く出てきてびっくりしました。「高島市」もまだまだ捨てたものじゃないなと言うところからのスタート。課題に対する解決法を考えるものの、期間・程度・どのように市政に反映されていくのかなど、もやもやしていた時期も……。しかし、その間にも何回も会議を重ねていくことで「高島」そして「協働」についても、少しずつわかるようになってきたように思います。この2年間で学んだのは、まちづくりに自ら携わることで、仲間づくりの機会が生まれることや、様々な人が関わることで、いろいろな分野の問題が解決できていくことです。大事なことはきっかけ。私は、この「まちづくり推進会議」に携われたことで「高島」についてもう一度しっかりと考える時間ができたのが一番の収穫でした。

観光グループ 木津 陽介

まちづくりに思うこと

私は、まちづくりに対して、ひとつの大きな思いがあって、公募委員として参加しました。それは、市民自らの創作意欲と技によって支えられている手づくり品（手づくり工芸品）の活用方法やPRについてです。推進会議では、その手づくり品が観光客をおもてなしするひとつの材料にならないかと思い、観光グループに所属しました。

グループ会議では、自分の思いを話しながら、これからの高島市の観光が良くなるよう様々な議論をメンバーと重ねました。自分自身が強く思っていた手づくり品の大切さ、それらの創作活動が観光客を迎え入れるおもてなしの材料となることがメンバーと共有できて有意義なグループ会議となりました。

今後は、手づくり品がもっと活用され、観光客の体験活動などにつながっていけばよいと思います。また、手づくり品が広く観光客に受け入れられ、作者の創作意欲を高め経済的にも効果を上げていくことを期待しています。

観光グループ 藤野 政夫

まちづくり推進会議に参加して

私は、「体験・山菜摘み農園」を営んでいて、まちづくり推進会議では観光グループに参加しました。

高島市は、多くの観光施設、豊かな自然、美しい風景、歴史的財産など、様々な観光資源を有しています。日々、観光業に携わっていると、まず、この広い市域の観光地をつなげていくネットワークが大切だと感じます。せっかく高島を訪れてくださった方に、数多い市内の観光地を紹介できているのだろうか、と思う時があります。もう一つは、観光地へ向かう交通手段の充実です。鉄道やバスの利便性の向上、道路幅の狭い山間部を中心とした道路改良、外国人観光客にも対応した観光案内看板設置が必要と考えています。この2年間、観光グループで様々な課題を語り合い共有できたことを大切にして、さらに元気な高島市になっていければいいと思っています。

観光グループ 西澤 恵美子

まちづくり推進会議へ期待すること

高島市まちづくり推進会議の委員として2年が経とうとしています。観光グループは6名の委員で構成され、それぞれ関わっている仕事は違っており、当初は異業種交流的な感じを受けました。会議を重ねるごとに積極的な意見が交わされ、「高島市を良くするには」の気持ちが表れていきました。お互いの共通認識として「おもてなし」の思いがはっきりと感じられました。観光には最も大切な気持ちです。まちづくりは、行政主導と活動している市民の連携が大切です。「びわ湖高島観光協会」が観光面での中核を成していただければ、旧町村で活動する観光ガイドのグループを束ねていただけたと思います。課題の一つとして、高島市は面積も広く、観光コースが絞りにくいとの意見がありました。旅行業の資格を持つ観光協会が企画を行い、地域の観光ガイドが案内を行えば、すぐに実現可能と考えます。2年にわたり、議論してきた課題を観光協会にも共有していただき、次期委員と調整の上、「観光高島」のさらなる充実を期待いたします。

観光グループ 川添 宏司

まちづくり推進会議(観光)に参加して

参加させていただいて学んだことは、高島市は、都会から日帰りでもそう遠くなく丁度良い距離にある自然豊かな観光地だと改めて思いました。自慢できる景観や季節折々の名所が広い市内に点在しています。『日本遺産』『重要文化的景観』に選定された数、『道の駅』の充実是他所から比べても自慢に値するものです。私も観光業に携わっている部分があるので感じる事は、観光で訪れる方々は、事前にHPやSNSでの検索が主流なため特定の目的地を目指されます。JR各駅や道の駅はそんなピンポイントで訪れている人(いちげんさん)に、高島市はどんな街なのか、知らない街に何があるのか、街の情報(レアな店舗・お勧め散策コースなど)を与えられる極めて重要な施設だと思いました。また良好な街並み景観(維持管理されている建物、道路、公園)の保全、地域住民の街づくり意識(地域のお手入れ)が豊かな街づくりにつながり、観光客を受け入れる市民の「おもてなしの心」を育むと思います。

観光グループ 中條 祐子

市民協働のまちづくりに思うこと

高島市まちづくり推進会議観光グループに参加して早や2年が経とうとしています。

「観光客が行きかう高島市だったらいいのになあ」をテーマにメンバーと高島市の観光政策に真剣に取り組み、熱い思いを活発に意見交換することが出来ました。

海津・西浜・知内の水辺景観、針江・霜降の水辺景観、大溝の水辺景観、菅浦の湖岸集落の4カ所の重要文化的景観を高島市の観光の大きな資源としてとらえ、課題、対策など議論してきました。

ボランティアガイドの養成、充実、市民がおもてなしの心を持つ必要性、交通アクセスの問題や観光Wi-Fiの整備等々課題を確認し、対策を集約することが出来ました。

最終意見をまとめ、第2次高島市総合計画にも掲げている当グループの意見が反映されることを願います。

観光グループ 大石 幸夫

子どもの笑顔があふれるまちに♪

「子どもは未来！」高島の将来を支えていくのは子どもたち。その子どもたちが、ぴかぴかの笑顔で日々過ごせるまち。ひとりひとりが大切にされ、生まれ育った環境（家庭、地域等）に左右されずに、個性や能力が伸び伸びと育まれ発揮できるまち。子どもを中心にすえたまち＝高島市であって欲しい！と思いを強くした2年間でした。

高島には、豊かな自然と歴史と文化があります。この恵まれた子育て環境の中で、全身（五感）を使って遊び、感動体験を積み重ねることで、豊かな心が育まれていく。「まちづくりは、ひとづくり！」。ひとづくりは時間がかかることですが、子どもの育ちは待ったなしです。良いアイデアには、前例がなくてもスピード感を持って果敢に取り組み、軌道修正しながらチャレンジしていく。市民一人ひとりが、自分のできることで、子育てに関わっていく（私は、絵本で♪）。高島に住まうみんなが一つになれば、きっと実現できるはず♪

子育てグループ 平松 成美

ふりかえって思うこと

推進会議に参加して、子どもが育つ環境の厳しさ、課題の多さを改めて感じました。今後も行政や市民協働というかたちで、子どもたちの育ちのサポートを続けていかななくてはなりません。そして具体的・個別的な取り組みとは別に、必要性を感じたのは「高島では地域ぐるみで〇〇な子どもを育てていく」という共通認識を持つことです。子どもが育っていくためにはどんな要素が必要なのか、そのためにはどのような見守りやサポートが必要なのか、ということをお話し合っ

て〇〇の部分共有することです。私としては、高島の豊かな環境を活かすような言葉が入ることを願う訳ですが、その共有したことを実現するための施策を実行し、市外にも情報発信をすることが若者定住策にも資すると思います。そして何より、子どもたちの健やかな成長を地域でサポートすることによって、地域がいきいきとすることが大切です。2年間にわたり皆さんにはお世話になりました。ありがとうございました。

子育てグループ 是永 宙

まちづくり推進会議で感じたこと

私はこれまで地域の青年団活動に携わり、高島市から若者が減っていく現状を日々感じていました。その時は共に地域を盛り上げる仲間が欲しかったのですが、その現状は次世代の高島市の子育てに直結していることを、今回このまちづくり推進会議子育てグループに参加して強く意識するようになりました。グループの中では特に若者の定住が少ないという問題と、通勤通学などの移動手段の問題がよく話題に上りましたが、これらの問題はすべて過疎化の波が強く影響していると感じます。子育てだけに焦点を当てるのではなく、包括的に問題をとらえて、その問題意識を高島市全体で共有することが第一だと感じました。私自身、これから高島市で子育てを経験していく世代ですが、今は私達が育った頃のようにたくさんの同級生がいて、子育て世代が地域に広く認められていた時代とは違います。積極的に地域との繋がりを強め同世代と手を取り合っていくことが大切だと感じました。

子育てグループ 桂田 孝太

まちづくりに願うこと

私は、朽木住民福祉協議会に参加して、日々の暮らしの中での課題解決を考えていますが、住民の暮らしのデザインをすることは、まさにまちづくりだろうと思っています。朽木地域では、高齢者の課題が多くて、いつもは子育てのことを考えることは少ないのですが、今回、子育てのまちづくりのグループに参加して、子育てしやすさについて考えました。子育ての施策を聞かせていただくと、それなりに充実していて、他の市よりすぐれているところがあるのですが、子どもたちに必要な自由に移動する手段に欠けていることが見えてきました。一方、高齢者にも別の理由ですが、移動が難しくなっている課題が存在します。考えていくうちに、子育てしやすさも高齢者の暮らしやすさも同じ課題であることが見えてきました。財政には限りがあり、バス路線を増やすことは無理でも、別の視点による移動手段の利便性を図ることができないものか考えていただきたいと願っています。

子育てグループ 海老澤 文代

委員会に参加して

仕事柄（元高島市社協職員）、合併後の高島市の10年を地域福祉に視点を置いて見てきました。少子化、過疎高齢化、人口減少、限界集落化等々、更なる10年を見通した時に、そういった課題に如何に対処し活性化を図っていくか…？ 問題意識だけが共有化されていて、中々決定打が見出せそうにない困難な問題に、真正面から向き合う官民協働の「まちづくり推進会議」に期待を寄せつつ参加させていただきました。自己都合により欠席がちであった反省を踏まえつつも、熱心に交わされる議論の場を、多種多様な経験則を持つ人たちと共有できたことは、大変有意義であったと思います。日本全国、萎む地域をどうしていくかは国民の共通の課題でもあります。地方創生が叫ばれる昨今、この地で暮らし続けられる「高島らしい」新たな風土の醸成に、市民一人ひとりが我が事としてコミットしていけるように、「まちづくり推進会議」の更なる発展と輪の広がりを願っています。

一体感グループ 馬場 八洲男

まちづくり推進会議を振り返って思うこと

2015年6月21日に当推進会議はスタートしました。会場は、高島市観光物産プラザで行われ、この日は、まちづくりのテーマ出しとグループ分けが行われました。会場も教室型ではなく、参加者は輪の形になって着席。まずは楽しい雰囲気でのスタート、参加者それぞれに意気込みも感じられたが、いつの間にかこの雰囲気が変化していきました。

なぜだろう？一番に考えられるのには当推進会議が動き始めた時点で、この会議の目的や役割、そして2年間のスケジュールを明確化できなかったことがあげられます。この推進会議は行政と協働で進めていくことで動き始めたが、一番肝心なことを最初にお互いが共有出来なかったのではなかろうか？お互いの考えと進む方向、そしてスケジュール等の見解が違っていると協働作業はうまくいきません。あと、楽しさです。この2年間、委員も行政関係者も楽しかったのだろうか？

以上のようなことを少しでも参考にさせていただき、2期に繋いでいただければ幸いです。

一体感グループ 澤 孝彦

まちづくり推進会議を振り返って思うこと

この2年間、高島市まちづくり推進会議の一員として活動させていただき、本当にありがとうございました。改めて「まちづくり」や「協働」という言葉は、人によってとらえ方も様々だと感じました。また、そもそも何のための協働なのか、誰のためのまちづくりなのかを深く考え、議論していくことが重要だと感じた2年間でした。

職業柄、人口減少・少子高齢化と、社会的孤立や格差の広がりを背景に、あらゆる世代の生きづらさの問題が顕在化していることを問題視しています。まちづくりとは、経済的繁栄や、行政サービスを市民が補完するためにあるのではなく、子どもから高齢者まで、障害の有無に関わらず、誰もが、ここで暮らしていることが幸せだと思えるようなまちにしていけることを市民主体で行動することが、第一義にあると思います。まちづくりの価値とは何か、共通の理念や目標をしっかりとつくることも、次期メンバーの皆様でご検討いただければと思います。

一体感グループ 井岡 仁志

まちづくり推進会議を振り返って思うこと

私は、以前マキノ地域のまちづくり委員会に所属していました。しかし、それが無くなり市域を一体とするまちづくり推進会議が設置されると聞いたとき、今まで作り上げてきたマキノの魅力が大きな枠の一部になることで存在感が薄れてしまうのではと、とても不安に思った事を今でも覚えています。そのため、まちづくり推進会議になってからも「高島市の中でどれだけ我々のマキノを輝かせられるか」とばかり考えていました。しかし、気づいたことは「どれだけ各地域のノウハウを全体の為に生かし、高島市の良くしていくか」ということ。これからは、各地域が作り上げてきた魅力をいかに磨き伸ばしながら、うまく連携させるかが必要だと考えています。地元を愛するからこそオール高島で考え、みんながしっかりとタッグを組めば「強く輝く高島市」が育つのではないかと私は思います。

一体感グループ 中村 清作

まちづくり推進会議を振り返って思うこと

高島市が誕生したのを機に、旧町の特徴を活かし市民の声を取り入れていこうと「まちづくり委員会」ができ、合併してよかったとみんなが思えるよう、市民・行政・委員の方々と模索しながら参画させて頂きました。

年月が経ち、市全体での「まちづくり推進会議」が発足。私は自然を愛し、老若男女みんなが充実し、楽しく暮らし、活動できればと、「一体感グループ」を選ばせていただきました。

いざとなると、いかに奥の深い、広い課題であるかを思い知らされました。

みんなが愛している高島市、お互いにつながり助け合い、今何をしていくべきか、今後どのような環境づくりをするべきか。価値観の共有等、市民としての課題は山積みだと思います。ますます少子高齢化の波は押し寄せてきますが、自然に恵まれた高島を愛する者がより豊かに暮らして、花開くことを望んでいます。

一体感グループ 早藤 悦子

まちづくり推進会議を振り返って思うこと

まちづくり推進会議に委員として参画させていただいてから、もうすぐ2年の任期が終わろうとしています。今まで各旧町単位の委員会が、高島市全域での推進会議となって初めての年度となります。最初の会議で選出されたいくつかの課題の中で私は一体感グループに属しました。まず高島市の市民の思いがひとつになることが必要と思ったからです。一体感グループは途中から他の部会とのまとめ役になりましたが、結果次年度からの会議の進め方が見えてきたようです。他のグループが出された問題や提案には熱心に幾度も話し合いがなされたことが表れており、この2年間は大変良い経験になったと思います。次年度には一般の市民が常々感じている課題が吸い上げられてくる、そんな会議になれば良いと考えます。その課題に対して行政と委員とが議論し調査を行って何が市民協働でまちづくりに取り組めるか一緒に考えていければと思います。小さなことがらもひとつひとつ解決していけば、やがて高島市をより住みよいまちにと大きく変えていけるのではないのでしょうか。

一体感グループ 澤村 茂美

まちづくり推進会議を振り返って思うこと

公募で推進会議に参加させていただき、皆さんが「高島市をよくしよう！」と考えておられる事が良くわかりました。一番初めの会議の時、名簿を見た時に〇〇団体の代表者の方ばかりだったので、決まっている団体ばかりの構成会議なら公募しなくてもいいのではと疑問に思いました。私は「自然の良さを生かす高島市だったらいいのにな」のグループに参加させていただき、初めてお話しする人ばかりでしたが、「高島の自然を大切に守りたい、もっと良くしたい」という気持ちを皆さん強く持っている方ばかりで、足を運んで実際に朽木を散策したり、地元の方のお話を聞いたり、市の職員さんとの意見交換など、有意義な2年間でした。残念な事は2年間の意見交換の後の取り組みについて、これからどう動いて行こうかと言う事だと思います。また、一からスタートで意見交換をされるのでしょうか。私自身も高島の知らない事がいっぱいある中、とても勉強になったので、これからは高島の自然の良さを発信できる様にしていきたいと思っています。

自然グループ 角川 康恵

誰もができるまちづくり

「まち」をつくっているものとは何なのか。今ここで暮らす私たちがよりよい「まち」をつくっていくために何ができるのか。会議に参加する中で、そんなことを改めて考えるようになりました。「自然」というテーマで集まった私たちのグループでもそれぞれの見方や考え方がありました。こうして自分とは違う立場や視点からの話を聴くことで、新たな価値観を知り自分の視野を広げることに繋がりました。この会議に参加したことの意義はそこにあると思います。そして、まず私たちができることは「相手の言葉に耳を傾けること」ではないかと感じました。この会議はそのよい機会であり、逆に自分はどうか考えるのか聴いてもらえる場でもありました。聴く場があり、話す場がある。そんな雰囲気が高島のあちこちに広がれば「まち」のこれからについて考える機会も増え、おのずとよりよい方向へ進んでいくのではないか。その始まりがこの会議であることを期待します。

自然グループ 石脇 和

まちづくり推進会議を振り返って思うこと

まちづくり・・１０人いたら、十人十色のまちづくりの思いがあります。ましてや行政との「市民協働によるまちづくり」を、となると。みなさん「一歩引き・構えて」になりますか。

今回のまちづくり推進会議、テーマごとにグループが作られ、そのテーマに沿って委員とオブザーバー参加の市職員と意見交換をしながら、課題や解決の方策を探る。時には、現場訪問をして活動内容や実施状況を。

二年間の任期。いろいろなことがあり、実質動いたのは１年余りでしたが、グループ（自然）としては、テーマ「自然の良さを生かす高島市だったらいいのにな」に沿ったまちづくりについての提案などを、協働して導きだせたのではと。ただ、推進会議の全委員との意見交流・親睦の機会が少なく、少し残念でしたが。広くて、地域性が強い高島市ですが、それぞれの地域の特性をいかしつつ、市全体がつながる「まちづくり」ができたらと。

自然グループ 榎 始

自然部会を振り返り

歴史ある景観、私達が誇りに思う高島の自然、それを活かした町づくりに、これからの進むべき未来があると、私は思います。その為に、市内の町には、市民が知っている場所、又知らない素晴らしい自然、地域の人々でさえ余り気にしない風景、その中で育まれた四季折々のいつもの姿から、資源となるべき物を見つけ広める事、ポスターや広報誌等に、継続的に発信もしながら、ホームページ等を広く活用し、市内外に発案発信・広報力を生かして下さい。

若者や子どもたちの引き込みが、大人にも通じて素晴らしさや、成り立ちを楽しみながら教え、資源の発掘や継承に役立て、広報力と共に指導者やサポーターの必要性を感じます。

また、忘れ去られた昔の生活様式（森林活用、おくどさん、五右衛門風呂等）の復活の体験や作業の実施で資源の利活用を提案いたします。

自然グループ 三田村 勝

まちづくり推進会議へ期待すること

複雑、不透明に変化する社会、格差を生み出している社会、また、今後も低成長時代が続くと言われている中、それに対応したまちづくりは、どうしたらよいのかを考える時期を迎えています。それには、一人ひとりが「学び続ける」人間に成長する施策を推進していくことです。すでに、物質的豊かさより精神的豊かさの大切さに多くの市民が気付きます。「どう心を豊かにするか」を「ひとづくり」施策で活かす必要があります。例えば、地域の先人について学ぶ場を提供し、先人の足跡や地域の課題を学び「ひとづくり」に活かす等、その環境づくりに努めることです。これが「学び続ける」住民が主人公の生涯学習社会であると考えます。今まで、「ひとづくり」に重点を置いた施策が乏しかったため、「まちづくり」を進めていく上で多様な問題が生じていました。市民生活の中に「学び続ける」環境を醸成するため、グループの養成やそれを活かす体制を創ること、何よりも、積極的に推進するリーダーの育成が喫緊の課題です。その方向をめざした「まちづくり推進会議」の活動に期待しています。

若者定住グループ 小林 忠伸

振り返って・・・

現在の若者は地域のことをどう思っているのかという調査があります。地元は大好きだけれど、そこで暮らすことにはつながらないという。その理由は、地域での人間関係も希薄だし自分を生かす職場がないことをあげています。地元が大好きというのは単に家族や友人関係に限られたことになるらしい。これはいわゆる地域離れと見て取れますが、若者を留まらせる地域力がなくなっていることを示しています。子どもは学校と家庭と地域連携で育てよう、いざという時のために強固なコミュニティを築こうというスローガンは、まさに「言うは易く、行うは難し」になってしまっています。かつての地域の取り組みが衰退する中で、世代間の交流がもてない結果、住民意識の低下につながり、若者流出が進むのは当然の負のスパイラルです。各地域の若者を活かしたコミュニティ作りができたらいと思うが、地方における「若者定住」は国家的な問題であると実感しました。

若者定住グループ 太田 直子

まちづくり推進会議への期待すること

高島市の活力と魅力を更に高めて、市全体の振興を図る「まちづくり推進会議」に参画させていただき、メンバー全員で論議を重ねる中、多様な分野で見聞を広げながら、我が街の状況への理解も深める事ができました。また、2年の長きに亘る活動を通じ、課題の抽出のみならず、その解決策をも共有化できた事は、非常に意義深かったと考えます。

しかし、課題解決の数々の提案が出されたにも係わらず、それを具現化させる計画策定に至らなかった事実は、中途半端でまさに「画竜点睛を欠く」が如しで、痛恨の極みであります。

次期に継続協議されると伺ってはおりますが、本協議会で承認された6つのテーマの改善課題、ならびに解決策協議から導かれた結論等が棚上げされる事がないよう、お願いいたします。

また、本協議会の活動を進める中で、市政に関するデータベースとその解析部門の脆弱性を感じましたので、その是正もご検討いただければ幸甚に思います。

若者定住グループ 清水 俊雄

まちづくり推進会議を振り返って思うこと

まちづくり推進会議に委員として参加させていただき、様々な視点から高島を想い、盛り上げていこうと熱意のある皆さんと一緒に会議を重ね、改めてまちづくりについて深く考える2年間でした。若者定住グループに参加させていただきましたが、会議を進める中で、若者が地域で活動している環境やその現状など、多くの課題があることを知りました。それもこういった場に参加する機会が無ければ、なかなか考えることも少なかったと思います。よく他の市町村の方から「高島は地域の活動が活発で羨ましい」や他に環境のこと、子育てに関する事などを聞くことが多く、その時に改めて高島の魅力を感じる事が多いのですが、まちづくり推進会議に参加して、多くの課題を知り考える場をもっと身近な所で多くの方が知る機会があるといいなと思いました。いい機会を与えていただきありがとうございました。

若者定住グループ 大塚 康将

まちづくり推進会議を振り返って思うこと

私は若者定住のグループに所属していましたが、そこでは青年団のことを取り上げていただき、OBとして嬉しく感じました。青年団と若者の定住は直接関係ないように思われがちですが、若者が仲間たちと地域で活動することにより地域の特色を発見したり、地域の人達とつながることにより郷土愛が生まれることは実体験として感じていることであります。出会いが不足している現代において、青年団で若者同士が出会い、一緒にいろんな経験をすることでSNSのつながりでは感じられない人のぬくもりに触れ、将来を共にする人と出会えるきっかけにもなるはずです。

全体を通して思うことは、いろいろな問題がある中でもまだまだ高島市としての一体感を出すのは難しいのかなあと感じました。しかし、それぞれの地域の良さも大切にしながらそれを高島市の財産として受け止めていけば自然に一体感が生まれてくるのではないかと思います。

若者定住グループ 桂田 亜也子

委員として感じた事

まちづくり推進会議に参加させていただき多くの事を考えさせられました。私は、青年会議所活動を通じこれまで「高島の発展」「活気溢れる高島」を考え活動を行ってききましたが、市内には本当に多くの課題があり少しびっくりしました。私たち40代までの青年と呼ばれる世代がもっとしっかりと現状を捉え、立ち向かっていかなければいけない。推進会議に参加されている方々は私たちよりも上の世代の方が多く、我々世代がもっと関心を持つべきだと痛感いたしました。まだまだこれから多くの課題があると思いますが、市民一人ひとりがしっかりと考え、積極的に行動を起こすことが大事だと感じました。高齢者グループの方々にはあまり力にはなれませんでした。これから高齢者社会へと加速していく高島市にとっては今回、皆さんと共に考えた課題は大変重要な事だと感じました。今回、こういった大変素晴らしい考える機会を与えていただき感謝しています。有難うございました。

高齢者グループ 三田村 徹

まちづくり推進会議を振り返って

前任者の後を受け、高島市商工会からまちづくり推進会議に参加させていただきました。高齢者グループに入れていただき、市内の高齢者の現状や各地域の取り組み等を協議していく中で、今まで知らなかったことを学ぶことができ、また真剣に考える機会をいただきました。

しかし、参加グループについては、まちづくり推進委員としてあまりお役に立てなかったように思い反省しています。

今後、まちづくりに取り組んでいくためには、もっと市民にまちづくりについて関心を持ってもらうことが大事ではないかと思います。まちづくり推進会議だけのまちづくりになってはいけないし、市民の中の意見が反映できるような仕組みができればと感じました。

高齢者グループ 入江 かおる

まちづくり推進会議を振り返って思うこと

私は、地域での高齢者支援のボランティア活動を通じて、独居高齢者の厳しい現状を目の当たりにし、地域住民のかかわりの大切さ、そしてその地域を支える側にある行政・社協の地域に果たす役割の大きさを常に感じてきました。これまでの経験をこの会議に生かせる事があればと思い、第一回の会議に臨み「高齢者」のグループに迷い無く参加しました。以後8回のグループ会議を積み重ねてきました。高齢者を取り巻く多くの課題を共有しながら検討してきましたが、各委員の高齢者問題の関わり方に違いもあり、市民協働として取り組める有効な解決策は見出せませんでした。次年度のこの会議に向けての要望ですが、もう少しテーマをしばらく各テーマについて委員全員が共通の問題意識を持ち、それぞれの熱い思いが討議に反映出来るグループ編成にする事が大切だと思います。そして、この会議での課題解決策が地域住民の支え合い活動に生かされる事を願っています。

高齢者グループ 泉 婦美子

安心して住み続けられるまちづくりってなんだろう

急速に進む高齢化、独居世帯、老々介護、認知介護等深刻な問題が次々と上がってくる中、少しでも住み慣れた地域で、その人らしく生活をしていけるように、何かできないかと高齢者グループでは議論を続けてきました。思いはあっても、実現に向けては困難なことであったり、提案した内容についても、これから誰がどのように取り組んでいくのかという課題はまだまだあります。でも、困っている人は、すぐ目の前におられます。SOSを出せない人もいます。その声に早く気づくことが大切です。何か取り組みを進めていくと同時に、たくさんの人とのコミュニケーションをしっかりとって、気づきを増やし、支援の輪を広げていく事が大切だと実感しました。

それぞれの得意分野を生かした支援をすることで、支援者の生きがい作りにも発展します。お互いの気持ちを忘れず、たくさんの方の協力により笑顔が増え、住みやすいまちづくりができることを願います。

高齢者グループ 宮田 早苗

市民協働のまちづくりに思うこと

高齢者グループでは、高齢者が元気で安心して暮らしてもらえるためにはどうしたら良いかを考えましたが、難しい問題がいっぱいあります。

市のサービスで特定の買い物サービスはできないのか。バスに乗れない高齢者への対応はどうするのか。移送サービスについては、マキノや高島など部分的に取り組んでいるので、それを拡大することが大事だと思います。

配食サービスについては、高島や他のところでもやっているが、やはり地域の人で作った弁当の方が高齢者は食べやすいので、これを拡大してやっていければ良いと思います。

いずれにしても、高齢者にとって一番大事なのは、社協、行政、そして地域の人が一体となって、高齢者の皆さんが安心できるように支援することが大事だと思います。

高齢者グループ 地村 満信

企画・制作

高島市まちづくり推進会議

発 行

高島市役所 市民生活部 市民協働課

〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑 565 番地

T E L 0740-25-8526 F A X 0740-25-8156

Mail:kyoudou@city.takashima.lg.jp